

# 令和年度 学校防災教育実践モデル地域研究事業の取組

西予市教育委員会

## 1 研究の目的

- ・ いろいろな状況下での発災を想定して考えていくことで、正しく判断し、行動することができる態度を育成するとともに、弱者を守る、共に力を合わせる態度を育成する。
- ・ 拠点校を中心とした教職員の防災教育力を向上させるとともに、地区住民とどう関わることができるのか、地域にどんなことを発信できるのか等の防災意識を高める。

## 2 取組の内容

### (1) 防災マニュアルの見直し・作成

地震、津波、火災等の様々な災害に的確に対処し、被害を最小限に収めるため、全教職員の話合いのもと内容を見直し、改変している。今年度は、防災アドバイザーや被災体験者の助言等を参考に「被災時の児童引き渡し」の手順と「安否確認の方法」について見直しをした。

### (2) 実践委員会

14名の実践委員会メンバーにより以下のような内容で実施した。

第1回：事業内容の概略説明と年間事業計画の検討  
(7月)

第2回：事業内容の中間発表及び2学期に実施予定の活動について検討 (9月)

第3回：事業報告及び今後の取組について意見交換  
(12月)



【実践委員会】

### (3) 防災講演会

児童、保護者の防災意識をより高めるため、愛媛大学防災情報研究センター副センター長の二神透先生を講師に招き、防災講演会を行った。本物の津波の映像を見たり、津波の怖さについて話を聞いたりすることで、防災に対する意識が高まった。



【防災講演会】

### (4) 防災に関連する授業実践 (参観日)

防災教育に視点を当てた授業を公開した。(3、4年生) 自然災害が発生した際に想定される被害や、自分の命を守るためにどのような行動をとるべきかについて学習した。また、被災後の状況についても話し合い、みんなで助け合いながら困難を乗り越えていくために、自分ができることについて考え、自助・共助の意識を高めた。

調べたことを新聞にまとめ、掲示することで保護者への啓発を図った。



【3年生】



【4年生】



【掲示物】



【掲示物】

(5) 救命救急法講習会への参加

これまで、保護者・教職員を対象に心肺蘇生法やAEDの操作方法について講習会を開催していたが、今年度は、自助・共助の観点から4年生以上の児童が講習会に参加した。



【保護者】



【児童】

(6) 児童引渡し訓練

防災マニュアルに沿って、地区ごとに受付を設置し、訓練を実施したが、地区によって混雑が見られた。保護者から、「地区にこだわらず、臨機応変な受付ができるとうい」という意見をいただき、防災マニュアルを見直すきっかけとなった。



【地区ごとに設置した受付】



【引渡しの様子】

(7) 防災ワークショップ(通学合宿時)

毎年、地区の公民館主催で「通学合宿」を実施しているが、今年度は、公民館の理解、協力を得て、活動の中に「防災ワークショップ」を組み込んだ。

「今、地震が起こったらどうするか」をテーマに「公民館で起こったら」「学校で起こったら」「家で起こったら」と発生時の場所を変えてグループごとに話し合った。周囲はすでに暗くなってきており、子どもたちは夜間の地震発生について想像しやすく、夜間の避難についてどのように行動すればよいか考えることができた。

子どもたちは、夜間に避難するときの危険性や気を付けること、保護者がいない状態で自分たちがすべきこと、できることなどについて考えを深めたり、他のグループに紹介したりして、真剣に学習することができた。



【グループでの話し合い】



【発表の様子】

(8) 被災地域視察研修(岩手県)

拠点校の防災担当者が、東日本大震災当時の被災地(大船渡市、陸前高田市)の視察研修を行った。大船渡市の赤崎地区では、避難所の責任者から当時の話を聞いた。センターの周囲に津波があつという間に押し寄せてきたこと、危険だと判断し、建物の屋上に子どもや女性を押し上げたこと、狭いセンターに最大300人ほどの避難者が集まり、約3か月間の避難所生活を送ってきたことなどの説明を受けた。津波の怖さを痛感するとともに、今後の防災教育についてすべきこと、準備しておくことなどを再確認することができた。



【赤崎地区漁村センター】  
【震災当時の避難所】



【避難所の様子について】



アリーナの外側は、避難所となった時、運動場からトラックなどを横付けし、荷物をアリーナに入れやすくなっている。雨が降っても濡れないように、軒下が長くとってある。



津波の被害に遭い、近くの高台に新設された新校舎。新校舎は、今後、避難所としても使えるように、児童の学習の場所と避難所が分けられるよう工夫されている。





クラブハウスは、普段、地域の方も使えるスペースになっている。避難所になった時は、高齢者や配慮が必要な方が使えるようになっていて、和室やシャワー室も設置されている。

道路沿いに津波避難場所への案内板が多く設置されていた。(スクールバスや、初めて訪れた方のため)。ソーラーパネルが付いており、夜でも光って見える様になっている。これがあると、明浜でもスクールの避難に有効だと感じた。

震災遺構として、あちこちに建物が残されていた。この建物は4階まで窓がなくなっており、津波の高さを実感することができる。4階だからといって安心できないことを物語っていた。

### (9) 被災体験者による講演会

震災時、岩手県の小学校で校長先生をされていた方に講師として来ていただいた。地津波の被害を受け、避難所での対応にあたられていた方の話には重みがあり、子ども・保護者全員が真剣に話を聞いていた。改めて津波の怖さを知り、日ごろの訓練や備えの大切さを感じることができた。



【講演会】



【避難訓練】  
(運動場から二次避難場所へ)

### (10) 避難訓練

大地震・大津波を想定した避難訓練を実施した。保護者、地域の方にも参加いただいた。一次避難場所の運動場から二次避難場所の高台へ避難した。

### (11) 研修会

被災体験者を講師に職員の研修会を実施した。避難後に実際体験したことを説明していただいた。車、電話も使えず、道路も通れない状況下で児童全員の安否確認を行ったことや日ごろの訓練の大切さなど、これから備えておくべきことなどについても話を聞き、大変有意義な会となった。



【研修会】



【二次避難場所の高台へ】

### (12) 地区の避難訓練への参加

子どもに地区の避難訓練に参加するよう呼びかけ、地区の避難場所について確認をした。指導者から具体的な指示は出ていなかったが、児童は身を守る行動をとることができていた。学校で避難訓練に真剣に取り組んでいる成果が見られた。



【地区の避難訓練】



**【地区の避難訓練】**

(13) 防災マップ作り

まず、第1段階として、防災マップの必要性や作成の仕方について説明を受けた後、津波予想ラインを書き込んだり、自分の家や避難場所の位置を確認してシールを貼ったりした。また、次回の現地調査をどのようなコースで行うか、グループごとに相談した。



**【防災マップ作りの説明】**

第2段階として現地調査を行った。前回話し合ったコースを歩き、危険箇所や防災設備などを見つけ、記録したり、写真を撮ったりした。また、避難場所へ行けない時に備えて、別の避難場所へのコースも調べた。



**【現地調査】**

最後に現地調査で調べたことや撮った写真をマップに貼り付け、自分たちの地区の防災マップを作成した。実際に使用する時のことを考え、道路が見えているか写真を貼る場所を考えたり、現地調査で感じたことを必要な情報として書き込んだりしながらマップを完成させた。

完成した防災マップを地区ごとに発表し、自分たちの避難ルートについて確認したり、他のグループの防災マップの良さを見つけたりした。児童の防災意識がより高まった。



**【防災マップ作り】**



**【発表会】**

(14) スクールバス乗車時の避難訓練

**【下校時】**

地震発生時刻や場所などは決めず実施した。バスに同乗している教職員に地震発生連絡を入れ、バスの運転手の指示によって避難するという流れで行った。

1台のバスでは、地震発生連絡を受けた場所が、もう少し進むと上り坂があり、高台に到着できる場所であったため、運転手の判断でバスに児童を乗せたまま高台に避難した。

もう1台バスは、道路に高低差がない海岸沿いで、地震発生連絡を受けたため、運転手の判断で、バスを停止し、児童はランドセルなどで頭を守った。その後、運転手の指示に従って下車し、避難場所まで歩いて避難した。



**【バスで避難】**



**【歩いて避難】**

**【登校時】**

下校時と地震発生連絡を受けた場所は異なったが、1台は少し進むと高台に到着できる場所で地震発生連絡を受けたため、バスで高台まで移動して避難した。もう1台は、しばらく高低差がない場所で連絡を受けたため、バスを下車して近くの避難場所に歩いて移動した。



**【歩いて避難】**



**【バスで避難】**

(15) 学習発表会での発表

6年生が、総合的な学習の時間を中心に学んできたこと、取り組んだことを発表した。また、子どもたちが作成した防災マップを掲示することで保護者への防災に対する意識を高めた。



**【発表の様子】**



**【防災マップの掲示】**

### 3 取組の成果

- (1) 防災講演会や通学合宿でのワークショップにおいて、夜間時の被災、登下校中の被災など様々な状況下での被災を想定し、自分がどのような行動をとればよいのか考え、話し合い、意識を高めて避難訓練を実施した。その結果、児童は、もしもの時の避難行動や避難先などを理解することができ、避難訓練では、自分で考え、率先して行動する姿が見られ、防災意識や知識が確実に向上してきた。
- (2) 家庭や地域と連携し、学校にいる時に被災した際の避難場所へ保護者と一緒に避難したり、地区の避難訓練への参加を促したりしたことで、教職員や地区全体の防災意識が高まった。その高まりが児童にも浸透し、活動を真剣・活発に行うベースになっていたように思われる。
- (3) 実効性のある防災マニュアルの作成について研修を受けたり、被災地域を視察した教職員が中心となって研修を行ったりしながら、防災マニュアルを見直すことができた。
- (4) 通学合宿でのワークショップ等において、保護者と離ればなれになった時を想定し、何をすべきか考えさせた結果、長期化する避難所での生活で、自分は何ができるのか考えを深めることができた。
- (5) 児童が作成した防災マップを地域の防災学習で使う計画や、今年度の避難訓練の反省を来年度の学校・地域の避難訓練に活かす計画が出てくるなど、定期的な防災学習へ向けて、学校と地域の意識が高まった。

### 4 今後の課題

- (1) 今回の事業の成果を西予市内の他校に効率よく広めていく必要がある。
- (2) 学校の防災教育と地域をさらに連携させていく必要がある。
- (3) 難後の家族間の連絡や、避難所での生活については、あまり踏み込んだ学習ができなかった。地域が主となることではあるが、学校での扱いを検討し、学習を深めていく必要がある。
- (4) 明浜は、崖崩れ等により集落が孤立する可能性のある地区である。孤立し、保護者と連絡がつかない状況でのよりよい対応等についてまだ漠然としているため、今後、連絡体制について検討していく必要がある。